

Psychiatry and Clinical Neurosciences

Psychiatry and Clinical Neurosciences, 78 (11) は, Review Article が 3 本, Regular Article が 7 本掲載されている。国内の論文は著者による日本語抄録を, 海外の論文は精神神経学雑誌編集委員会の監修による日本語抄録を紹介する。

Review Article

Practice Guidelines for Bipolar Disorder by the JSMD (Japanese Society of Mood Disorders)

T. Kato*, K. Ogasawara, K. Motomura, M. Kato, T. Tanaka, Y. Takae-su, S. Nio, T. Kishi, M. So, K. Nemoto, E. Suzuki, K. Watanabe, K. Matsuo, JSMD Bipolar Disorder Guidelines Revision Working Group, JSMD Bipolar Disorder Committee and JSMD Guidelines Committee

*Department of Psychiatry & Behavioral Science, Juntendo University Graduate School of Medicine, Tokyo, Japan

JSMD (日本うつ病学会) による双極症診療ガイドライン

日本うつ病学会 (Japanese Society of Mood Disorders : JSMD) は 2011 年に双極性障害の治療ガイドラインを発表した。新たな知見を取り入れた今回のガイドラインは, 米国医学アカデミー (National Academy of Medicine : NAM) のガイドラインに準拠し, システマティックレビューとメタ解析を活用し, 患者や家族の意見, および多職種からの意見を考慮して作成された。このガイドラインは, 多くの点で, 気分安定薬と第二世代抗精神病薬の併用療法を支持している。しかし, 薬物ごとのエビデンスが少ないため, メタアナリシスを行う際に, 性質が異なるにもかかわらず, 気分安定薬, 第二世代抗精神病薬とひとまとめにした, という限界もある。それでも, これらのガイドラインは, 日本の精神科医にとって臨床判断のサポートとなる。

Review Article

Initial treatment choices for long-term remission of chronic insomnia disorder in adults : a systematic review and network meta-analysis

Y. Furukawa*, M. Sakata, T. A. Furukawa, O. Efthimiou and M. Perlis

*Department of Neuropsychiatry, University of Tokyo, Tokyo, Japan

成人の慢性不眠症の長期寛解のための初期治療選択肢 : 系統的レビューとネットワークメタアナリシス

【背景】私たちは不眠の認知行動療法 (cognitive behavioral therapy for insomnia : CBT-I) ・薬物療法・それらの併用療法の, 成人の慢性不眠症に対する長期および短期における相対的有効性・忍容性を評価した。【方法】複数のデータベースを 2023 年 12 月 27 日時点まで検索した。睡眠薬を内服していない慢性不眠症の成人を対象とし, CBT-I ・薬物療法・併用療法のいずれか 2 つ以上を比較したランダム化比較試験を組み入れた。エビデンスの信頼性は CINeMA を用いて評価した。主要評価項目は長期寛解とした。副次的評価項目は, 長期時点での脱落と自己評価の睡眠連続性変数, および, 以上の項目の短期時点におけるものとした。頻度論的ランダム効果ネットワークメタアナリシスを用いて解析した (CRD42024505519)。【結果】ランダム割り付けされた 823 名の参加者 (平均年齢 47.8 歳 ; 女性 60%) を含む 13 の試験を同定した。CBT-I は, 長期的には薬物療法よりも有益であった (期間中央値, 24 週間 (範囲, 12~48 週間); 寛解オッズ比, 1.82 (95% 信頼区間 confidence interval : CI), 1.15~2.87 ; (エビデンスの信頼性 : 高)) 一方, 薬物療法に対する併用療法の有益性の証拠は弱く (1.71 (95% CI,

0.88~3.30：中等度)), 併用療法に対する CBT-I の明確な差は認められなかった (1.07 (95% CI, 0.63~1.80：中等度)). CBT-I は薬物療法よりも脱落が少なかった。短期アウトカムは、総睡眠時間を除いて薬物療法よりも CBT-I が優れていた。薬物療法開始群の平均長期寛解率が 28%であったことを考えると、CBT-I の長期寛解率は 41% (95% CI, 31%~53%), 併用療法は 40% (95% CI, 25%~56%) であった。【解釈】今回の研究では、慢性不眠症に対して CBT-I から開始したほうが、薬物療法よりも有効であることが明らかになった。併用療法は薬物療法単独よりはよいかもしれないが、CBT-I 単独よりも負担を増やす価値はなさそうである。

Review Article

Sleep and circadian disruption in bipolar disorders : From psychopathology to digital phenotyping in clinical practice

A. C. Tonon*, A. Nexha, M. M. da Silva, F. A. Gomes, M. P. Hidalgo and B. N. Frey

*1. Mood Disorders Program and Women's Health Concerns Clinic, St. Joseph's Healthcare Hamilton, Hamilton, Canada, 2. Department of Psychiatry and Behavioural Neurosciences, McMaster University, Hamilton, Canada

双極症における睡眠と概日リズムの乱れ：精神病理学から臨床でのデジタルフェノタイピングへ

睡眠と生体リズムは、生涯にわたって気分調節に不可欠であり、特に双極症 (bipolar disorder : BD) では、すべての気分状態において睡眠相、睡眠構造、睡眠時間の変化が生じる。これらの乱れは、生活の質の低下、自殺リスクの上昇、認知機能の低下、再発率の上昇につながっている。本総説は、BD における睡眠障害の病態生理を明らかにし、これらの現象の理解を深めて臨床での応用を確立することを目的としている。また、生態学的経時的評価 (ecological momentary assessment : EMA) やデジタルフェノタイピングなど、睡眠や生体リズムの評価方法の進化についてもまとめている。さらに、概日リズムの気分調節への関与を認識することの重要性を強調し、潜在的な治療ターゲットを示唆している。今後の研究の方向性としては、概日時計遺伝子のメカニズムの解明、概日リズムに対する環境影響の理解、BD における睡眠障害と気分調節の双方向性の関係の調査などが挙げられる。EMA 技術やデジタル表現型に関連した評価法の標準化やプライバシーの問題に対処することは、研究を進めるうえで不可欠である。BD の診断およびその治療における生体リズムの広範な意味を理解し、臨床応用性を高める

ためには、共同研究が不可欠である。全体として、BD における睡眠と生体リズムの重要性を認識することは、的を絞った介入や、BD の根底にあるメカニズムのより深い理解を通じて、転帰の改善につながることを期待される。

Regular Article

Associations between self-reported parasomnias and psychiatric illness in 370,000 patients with sleep disorders

U. Hanif*, A. Cairns, V. Mysliwiec, R. G. Bettinardi, M. Elbaz, U. Gimenez and E. J. M. Mignot

*1. Data Science, BioSerenity, Paris, France, 2. BioSerenity Research Group, BioSerenity, Danvers, USA

睡眠障害患者 37 万人における自己申告での睡眠時随伴症群と精神疾患の関連性

【目的】睡眠障害患者における自己申告による睡眠時随伴症群を評価し、精神疾患、併存疾患、主観的睡眠評価、睡眠ポリグラフ検査結果との関連を検討する。【方法】2004 年から 2019 年の間に米国 30 州にわたる 240 の睡眠センターから収集した予診票と睡眠ポリグラフ検査の結果を後ろ向きに分析した。全患者 54 万人のうち、睡眠時随伴症群特有の質問に回答した 371,889 名を対象とした。睡眠時随伴症群特有の質問に「よくある」または「いつもある」と回答した患者を「症状陽性」、 「数回ある」または「一度もない」と回答した患者は「症状陰性」(対照)とした。【結果】対象者の 54.5% が男性で、平均年齢は 54 歳 (範囲：2~107 歳) であった。種類別の睡眠時随伴症群の頻度としては、いずれかの睡眠時随伴症群が 16.0%、寝言 8.8%、入眠時幻覚 6.0%、睡眠関連摂食障害 4.8%、金縛り 2.1%、睡眠時遊行症 1.7% であった。睡眠時随伴症群の頻度の高さは、うつ病の診断と高い関連があった (オッズ比=2.72)。すべての睡眠時随伴症群は、若年および女性であること、抑うつ、不安、不眠、レストレスレッグス症候群、疼痛、病状、疲労、眠気の症状と関連していた。客観的な睡眠指標との関連性は、睡眠全体の特徴を示し、ノンレム睡眠とレム睡眠の睡眠時随伴症群を弱く区別した。機械学習により、睡眠時随伴症群患者と対照群を正確に分類した (バランス精度は 71~79%)。ベンゾジアゼピン系薬剤、抗精神病薬、オピオイドは睡眠時随伴症群の罹患率を高め、抗ヒスタミン薬とメラトニンは罹患率を下げた。Z-drugs は睡眠関連摂食障害の可能性を高めることがわかった。【結論】われわれの所見から、睡眠時随伴症群はうつ病や不安の症状として臨床的に重要であるが、まだ十分に研究されていないことが示唆される。因果関係や診断・治療への影

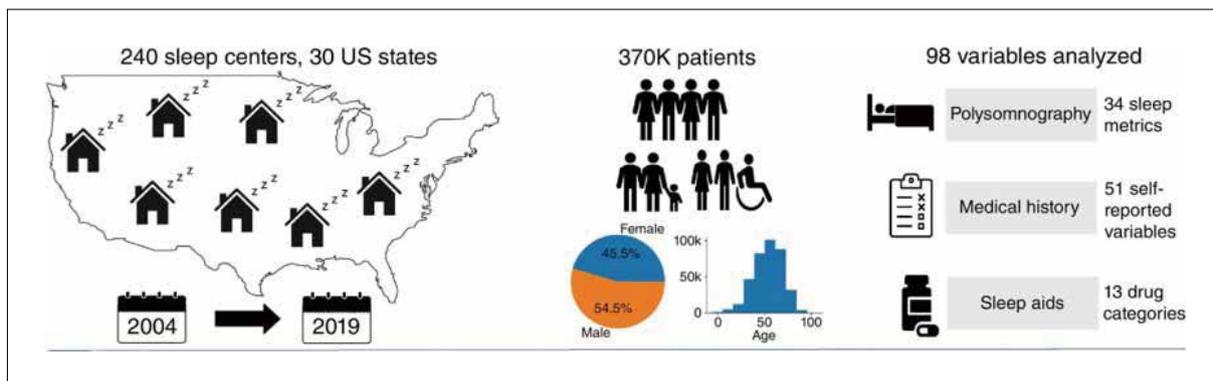


Figure 1 Conceptual illustration of the data collected, the methodology employed, and the main findings of the study. ML, machine learning.
(出典：同論文, p.669)

響など、多疾患併存の性質を数値化するためにはさらなる調査が必要である。

Regular Article

A double-blind trial of decoded neurofeedback intervention for specific phobias

C. A. Cushing*, H. Lau, M. Kawato, M. G. Craske and V. Taschereau-Dumouchel

*Department of Psychology, UCLA, Los Angeles, USA

限局性恐怖症に対するデコーディッドニューロフィードバック介入の二重盲検試験

【目的】 マルチボクセル・ニューロインフォースメントと呼ばれる新しいクローズドループ機能的磁気共鳴画像法は、意識の外で脳内の恐怖表現を直接誘発することにより、曝露ベースの介入に対する主観的な嫌悪感を軽減する可能性がある。本研究では、限局性恐怖症に対する介入法としてこの方法を検証する。【方法】 無作為二重盲検対照単一大学試験において、少なくとも2種類（標的1つ、対照1つ）の動物垂型限局性恐怖症と診断された個人を、標的である動物表象の暗黙の活性化に対して報酬を与えるマルチボクセルのニューロインフォースメントを1回、3回、または5回受ける群に無作為に割り付けた（1：1：1）。恐怖刺激に対する扁桃体の反応は、標的動物と対照動物の割り付けを知らされていない研究スタッフによって評価された。治療前と治療後の差を、二元配置反復測定分散分析にて分析した。【結果】 合計23名の参加者（69.6%が女性）が、1回（ $n=8$ ）、3回（ $n=7$ ）、または5回（ $n=7$ ）のマルチボクセル・ニューロインフォースメントを受ける群に無作為に割り付けら

れた。18名（各群 $n=6$ ）の参加者が主要アウトカムについて分析を受けた。ニューロインフォースメント後、標的恐怖症に対する扁桃体反応の有意な減少を示す相互作用が観察されたが、対照恐怖症に対しては観察されなかった。介入の結果として、有害事象や脱落は報告されなかった。【結論】 結果は、マルチボクセル・ニューロインフォースメントが限局性恐怖症の脅威シグネチャーを特異的に減少させることを示唆している。結果として、この介入により従来の精神療法を補完し、治療を求める患者に苦痛を与えない経験をもたらす可能性がある。本試験は、これらの結果を再現し、実生活での曝露に対する効果を検討するための、より大規模なランダム化臨床試験の段階を設定するものである。【臨床試験登録】 本臨床試験はClinicalTrials.govに前向きに登録され、IDはNCT03655262である。

Regular Article

Homogenization of word relationships in schizophrenia : Topological analysis of cortical semantic representations

R. Hayashi*, S. Kaji, Y. Matsumoto, S. Nishida, S. Nishimoto and H. Takahashi

*Human Informatics and Interaction Research Institute, National Institute of Advanced Industrial Science and Technology (AIST), Tsukuba, Japan

統合失調症患者における単語関係の均質化：脳内意味表現のトポロジー解析

【目的】 統合失調症患者は、典型的に思考の乱れによるさまざまな症状を呈し、言語報告においては、抽象水準に依存して具象化傾向や過包括を示す。具象化傾向と過包括は一見すると矛

盾しているが、これらの症状を説明する根底の精神病理はいまだ不明である。本研究では、機能的磁気共鳴画像計測と符号化モデリング手法を用いて、脳活動パターンとして表現されるさまざまな単語の概念どうしが、統合失調症患者においてどのように異常な結びつきをしているか、異なる抽象水準で検討した。【方法】さまざまな単語概念の脳活動表現を計測するために、統合失調症と診断された14名と健常対照者17名に対し、機能的磁気共鳴画像法による撮像を行った。そして、パーシステントホモロジー (persistent homology : PH) 法を用いて、統合失調症患者、健常対照者、およびランダムデータにおける単語表現のトポロジー構造を解析した。脳内表現空間内における非類似度のスケールを変えることで、トポロジー構造を異なる抽象水準で分析した。【結果】健常対照者と比較して、統合失調症患者は、異なる抽象水準にわたって、より均質化された単語関係を示すことが明らかになった。さらに、統合失調症患者のトポロジー構造は、対照者と比較して、ランダムなネットワーク構造へとシフトしていることが示された。PH法によって、統合失調症患者の意味論的表現と健常対照者の意味論的表現を区別することに成功した。【結論】今回の結果は、統合失調症において観察される抽象化能力の欠陥の根底にあるメカニズムを説明することができる。すなわち、個々の概念の同質的な結びつきは、意味論的表現において詳細スケールでの文脈的なつながりの減少と、粗いスケールにおける概念間の明確な境界の欠如の両方を反映しており、それぞれが具象化傾向と過包括を引き起こすと考えられる。

Regular Article

The effects of potentially traumatic events on the recovery from pre-existing anxiety and depression symptomatology and the risk of PTSD

P. G. van der Velden*, C. Contino, L. Lenferink, M. Das and L. Wittmann

*1. Tranzo, Tilburg School of Social and Behavioral Sciences, Tilburg University, Tilburg, The Netherlands, 2. Centerdata, Tilburg, The Netherlands

心的外傷となりうる出来事が、既存の不安・抑うつ症状の回復と PTSD のリスクに及ぼす影響

【目的】最近の心的外傷となりうる出来事 (potentially traumatic events : PTEs) が、既往メンタルヘルス問題からの回復をどの程度妨げているかは、ほとんどわかっていない。既往メンタルヘルス問題からの非回復が心的外傷後ストレス症 (post-

traumatic stress disorder : PTSD) のリスクを高める度合いについても同様である。本研究の目的は、これらの影響について洞察を得ることである。【方法】オランダの集団ベースの被害者研究 (Victims in Modern Society : VICTIMS) の6回の年次調査からデータを抽出した。連続2回の調査 (T1 および T2 とする、 $n=6942$) に参加した成人回答者のうち、T1 時点で重度の不安・抑うつ症状 (anxiety and depression symptoms : ADS) を有する者 ($n=487$) を抽出した。T1 と T2 の間に PTE があった回答者 (PTE 群、 $n=162$) と PTE がなかった回答者 (比較群、 $n=325$) を区別した。回復については5つの指標 (信頼性変動指数 (reliable change index : RCI)、症状軽減の程度、T2 でのカットオフスコアに基づく) を適用した。多変量ロジスティック回帰分析を用いて、T2 時点における ADS からの回復程度および probable PTSD (ほぼ確実な PTSD) の違いを調査した。【結果】11 の異なる変数で調整したところ、PTE 群では比較群に比べて、5つすべての回復指標において、T1 から T2 の間に重度の ADS から回復する可能性が少なかった ($0.40 \leq$ 調整後 OR ≤ 0.66)。回復しなかった PTE 群の人々は、回復した人々 ($0 \sim 29\%$; $8.96 \leq$ 調整後 OR ≤ 26.33) よりも、T2 において probable PTSD が生じた割合がかなり高かった ($63 \sim 82\%$)。【結論】心的外傷となりうる出来事を最近経験したことが、既存の不安・抑うつ症状からの回復を妨げ、それによって PTSD のリスクを増加させる。

Regular Article

The longitudinal patterns of depression subtypes and stressors in depression severity in the Canadian longitudinal study on aging (CLSA)

Y. Su*, M. Li, N. Schmitz and X. Meng

*1. Department of Psychiatry, McGill University, Montreal, Canada, 2. Douglas Research Centre, Montreal, Canada, 3. School of Public Health and Emergency Management, Southern University of Science and Technology, Shenzhen, China

Canadian longitudinal study on aging (CLSA ; 加齢に関するカナダ縦断的研究) におけるうつ病のサブタイプとストレス因子のうつ病重症度における縦断的パターン

【目的】本研究の目的は、うつ病のサブタイプの縦断的パターンを明らかにし、うつ病のサブタイプの安定性、COVID-19 に関連するストレス因子、うつ病の重症度との関連を検討することである。【方法】本研究では、45歳以上のカナダ人成人を対象とした全国規模の長期研究である Canadian longitudinal study

on aging (加齢に関するカナダ縦断的研究)のデータを利用した (n=12,957). 潜在プロファイル分析を用いて、潜在的なうつ病のサブタイプを同定した。次に、潜在移行分析を適用してこれらのサブタイプの経時的安定性を評価した。階層的多変量線形回帰を用いて、これらの同定されたうつ病サブタイプ、COVID-19 関連ストレス因子、男性・女性それぞれのうつ病重症度との関係を検討した。【結果】特徴的なうつ病のサブタイプが同定された。非定型うつ病を除き、他のうつ病のサブタイプは経時的により大きな安定性を示した。また、メラニコリックうつ病 (B=9.432) と定型うつ病 (B=6.677) は、パンデミック期間中のうつ病重症度と強く関連していた。健康関連のストレス要因 (B=0.840)、葛藤 (B=3.639)、リソースへのアクセス困難 (B=0.927)、家族との分離 (B=0.840)、介護経験 (B=0.764) は、うつ病の重症度上昇と有意に関連していた。性別別の分析により、ストレス因子とうつ病重症度との関連において、男性と女性で差があることも明らかになった。【結論】本研究は、うつ病のサブタイプの潜在クラスタリングとその安定性について貴重な知見を提供するものである。ストレス因子はうつ病の重症度上昇と関連しており、男女間で明確な関連が認められた。これらの知見は、パンデミック中およびパンデミック後のメンタルヘルスケアに必要なエビデンスベースを提供することで、標的を絞った早期介入や統合的な臨床管理戦略に示唆を与えるものである。

Regular Article

Identification of risk loci for postpartum depression in a genome-wide association study

X. Li*, N. Takahashi, A. Narita, Y. Nakamura, M. Sakurai-Yageta, K. Murakami, M. Ishikuro, T. Obara, M. Kikuya, F. Ueno, H. Metoki, H. Ohseto, I. Takahashi, T. Nakamura, N. Warita, T. Shoji, Z. Yu, C. Ono, N. Kobayashi, S. Kikuchi, T. Matsuki, F. Nagami, S. Ogishima, J. Sugawara, T. Hoshiai, M. Saito, N. Fuse, K. Kinoshita, M. Yamamoto, N. Yaegashi, N. Ozaki, G. Tamiya, S. Kuriyama and H. Tomita

*1. Department of Psychiatry, Tohoku University Graduate School of Medicine, Sendai, Japan, 2. Department of Regional Alliance for Promoting Liaison Psychiatry, Tohoku University Graduate School of Medicine, Sendai, Japan

ゲノムワイド関連解析による産後うつ病のリスク遺伝子座の特定

【目的】複数の民族背景をもつコホートを蓄積した産後うつ病 (postpartum depression : PPD) のゲノムワイド関連解析 (genome-wide association studies : GWAS) では、有意に関連

する遺伝子座を特定できていない。そこで、われわれは、PPDに関連する遺伝子座を特定するために、詳細な交絡情報を用いて、日本の周産期女性を対象としたGWASを実施した。【方法】東北メディカル・メガバンク事業に登録された周産期女性9,260名からなる1番目の集団、同事業に登録する異なる周産期女性8,582名からなる2番目の集団、および、名古屋大学で募集した周産期女性997名からなる3番目の集団について、ゲノム多型のタイピングを行った。そのうち、出産1ヵ月後のエジンバラ産後うつ病尺度 (Edinburgh Postnatal Depression Scale) に基づき、PPDと分類されたのは1,421名、1,264名、225名であった。PPDの遺伝的素因に最も影響を与える交絡因子が選択され、交絡因子を調整したうえでPPDとの遺伝的関連性を評価するためにロジスティック回帰分析が行われた。【結果】3つの集団におけるGWASの結果を統合したメタ解析において、PPDに最も影響力のあった分娩回数と同居家族人数を交絡因子として解析を行ったところ、PPDとの間に有意な関連 ($P < 5 \times 10^{-8}$) を認める8つの遺伝子座 (*DAB1* 遺伝子領域内に位置する多型 rs377546683, *UGT8* 遺伝子近傍に位置する多型 rs11940752, *DOCK2* 遺伝子領域内に位置する多型 rs141172317, rs117928019, rs76631412, rs118131805, *ZNF572* 近傍に位置する多型 rs188907279, *DIRAS2* 近傍に位置する多型 rs504378, rs690150, rs491868, rs689917, rs474978, rs690118, rs690253, *ZNF618* 遺伝子領域内に位置する多型 rs1435984417, *PTPRM* 近傍に位置する多型 rs57705782, *PDGFB* 近傍に位置する多型 rs185293917) が同定された。パスウェイ解析により、PPDと関連が示唆される多型は、シナプス電位の長期抑圧 (long-term depression)、性腺刺激ホルモンシグナル伝達、グルタミン作動性シナプス、オキシトシンシグナル伝達、Rap1シグナル伝達にかかわる遺伝子部位に有意に多く局在することが示された。【結論】今回のGWAS研究により、PPDと有意に関連する8つの遺伝子座が特定され、これにより、その発症の根底にある遺伝学的機序が解明される可能性がある。

Regular Article

Congenital hypothyroidism and risk of subsequent autism spectrum disorder and attention-deficit/hyperactivity disorder in Taiwan
H-Y. Lin*, C-S. Liang, S-J. Tsai, J-W. Hsu, K-L. Huang, T-P. Su, T-J. Chen, Y-M. Bai, T-W. Hsu and M-H. Chen

*1. Department of Psychiatry, Tri-Service General Hospital, National Defense Medical Center, Taipei, Taiwan, 2. Department of Psychiatry, Beitou Branch, Tri-Service General Hospital, Taipei, Taiwan

【目的】母親の甲状腺機能低下症と、その子どもの注意欠如多動症 (attention-deficit hyperactivity disorder : ADHD) や自閉スペクトラム症 (autism spectrum disorder : ASD) の発症リスクとの関連性を示唆するエビデンスがある。われわれは、先天性甲状腺機能低下症 (congenital hypothyroidism : CHT) 患者における ASD および ADHD の発症リスクを検討した。【方法】全国規模の集団ベースのコホート研究で、1998～2013 年の間に台湾の国民健康保険研究データベースから抽出された、CHT と確定診断され、かつ神経発達症群と診断されたことのない 12 歳未満の小児 1,260 名を登録した。さらに、性別、年齢、居住地

をマッチさせた 12,600 名を対照群とした。Cox 比例ハザード分析を用いて、CHT, ASD, ADHD の関連性を調べた。【結果】CHT 患児は対照群と比較して ASD (7.1% vs 1.3%, $P < 0.001$) および ADHD (39.7% vs 18.7%, $P < 0.001$) の発症率が高かった。Cox 回帰分析では、人口統計データおよび主要精神疾患の家族歴で調整したところ、CHT 患児は対照群と比較して ASD [ハザード比 (hazard ratio : HR), 4.72 (95% 信頼区間 (confidence interval : CI), 2.08～10.70) および ADHD (HR, 2.03 (95% CI, 1.49～2.77)) のリスクが高いことが示された。【結論】CHT 患児は対照群と比較して、ADHD のリスクが約 2 倍、ASD のリスクは約 4 倍上昇した。本研究は、CHD, ASD, ADHD の潜在的な病態生理を解明するために今後研究を重ねる必要があることを強調している。

想像してみしてほしい。この人形は動くのだ。右手が持つ棒にささったボール状の食べ物（タコ焼きと呼ばれる大阪のソウルフード）が、口の中に入ると棒から外れる。するとそのボールは人形の左腕の内部を通り、左手が持つ皿の上にくるんと出てくる。その時までには右手がそこまで下りていて、棒にボールがくっつき、再び口元へと上がっていく。それが、延々と繰り返されるのだ。しかもその間、椅子の周りを金魚と思しき赤い物体がぐるぐるまわっている。

作者の富永武は、1948年大阪府に生まれた。中学卒業後、さまざまな仕事をした後、2013年頃から、大阪の釜ヶ崎と呼ばれるエリアで生活を始める。このエリアは、1960年代から1990年代前半まで、つまり日本の高度経済成長とバブル経済期においては、建設現場に日雇い労働者を送り出す供給地であった。しかし、2000年代以降は、仕事につけないまま、野宿をする人が多い街となった。それに対して、NPOなどが支援に入り、その中の1つには、「釜ヶ崎芸術大学」と銘打った、誰でも学べる（俳句のワークショップなどもあったりする）市民大学があったりする。

富永が人形をつくり始めるようになったのは、2014年頃のこと。図書館で手にとった写真集に西洋のからくり人形が掲載されているのを見て、自分でもつくってみようと思ったというのだ。素材は、自分が飲んだ後のビールの空き缶。アルミを切り、平らに延ばすという作業があったりするので、人形を一体つくるのに半年間かかることもあるという。基本的に電気仕掛けで、最近では、人が作品の前に来たら動き出すようにセンサーまでつけている。

富永のからくり人形がする行為には、たこ焼きを食べることの他、腹を切る（切腹）、ビールを注ぐ、夫婦でリヤカーを押す、などがある。そのどれにも共通するのが、その場から動けないまま、単純な行為が延々と続く中で、ユーモアの中にペーススが混じってくることだ。しかも素材がチープであるために、そのペーススはさらに助長される。取材を受けたテレビ番組の中で、富永は言っている。「人前で暗い顔してたらあかん。周り暗くするがな。常に俺は笑顔や。心は泣いてんねんで。幸せのラインなんか決まってないねん。自分が決めるねん。」

保坂健二郎（滋賀県立美術館）

タイトル：たこ焼き太郎
作者：富永 武
技法・素材：アルミ缶、針金ほか
制作年：2022年
サイズ：27 × 27 × 47 cm
写真提供：鞆の津ミュージアム

